

本学学生の国語表記の実態

——読解を妨げるもの——

竹 浪 聡

本稿は、本学学生——三・四年生も含まれるが、主として一・二年生——の国語表記の実態を調査し、その一部をまとめたものである。取り上げた問題は次の通りである。

〔1〕 字形

〔1-a〕 平仮名

〔1-b〕 片仮名

〔1-c〕 漢字

〔2〕 用字法

〔2-a〕 漢字使用上の誤り

〔2-b〕 漢語を仮名で書いたもの

〔2-c〕 漢語の交ぜ書きしたもの

はじめに

日本では、文字が芸術の素材として創作・鑑賞の対象となるという伝統があり、文字の上手下手、あるいは文字に対して払う敬意の度合いでその人の評価を決定するような面がある。「書道」のみならず、芸事がすべて「道」という観念で人格に結び付けられ、その「道」の達人は必ず人格高潔の士であることが期待されるというような、日本文化に特有な考え方と無関係ではないだろう。特に文字は、知的側面と直接に結び付くため、一層、人を評価する尺度とし易い印象があったに相違ない。

これは単に印象に止まらず、手紙や履歴書等の筆跡でそれを書いた人の為人を推し量ったり、好悪の感情を持ったりすることは決して稀なことではない。卑近には学生の提出する試験の答案、単位論文、課題レポート等について、内容を読むより先に文字の印象によってある種の先入観——持ってはならないと自戒はするけれども——を持ってしまうことは、例えば筆者の場合、否定しようのないところである。願わくは読み易いものであってほしいと痛切に思うのである。

日本の社会では、未だ伝統的に文字が尊重され、価値的に見られている。手書きの書類がまだまだ多く用いられている現在、上手下手は一応ともかくとして

も、粗雑で貧困で不正確な文字表記は、決してよい結果をもたらさない。字面のそろった、正確な文字・表記はその内容の信頼度を強化するが、逆の場合、人はその内容まで疑わしく思う。

谷崎潤一郎が、字面は内容に影響し、体裁も既に内容の一部である、と述べた¹⁾のを承けて、森岡健二は次のように書いている²⁾。

一体、文字・表記の役目は、(中略)意味のまとまりを、文字と符号とによってゲシュタルト(形成)することである。つまりこのゲシュタルトがうまくいけば、文章は読み易いし、うまくいかなければ読みにくい。(中略)文字・表記が枝葉末節の道具でなく、内容の一部だということは、くれぐれも銘記すべきことだと思う。

原稿は、そのままの姿で多くの人に読まれるわけではなく、活字化したものが読まれるのだとしても、書き手と読み手との間には編集者や植字工が介在するのであり、すなわち手書きの文字は必ず誰かに読まれることを前提としているものである。書き手の意図がそうした人々に正確に伝わるような文字・表記でなければ、それが読み手まで速かに正確に届くことはむづかしい。

ともあれ、日本の社会における文字の尊重の気風は過去のものではないのであり、人の品性などと結び付けて考えないまでも、それは実務的にも必要なことであろう。文字・表記に対する神経が行き届いている原稿は、その内容についても大きな期待を抱かせる。なぜなら文字・表記に気を配るほどの者ならば、当然に内容についても十分な吟味をしているであろうし、論述についても、説得力のある構成をとるべく配慮していると期待されるからである。

筆者は今年度(1977)、本学において現代文章論を講じ、その中で学生に作文を課して来た。その提出物を見て思うことは、内容以前に、原稿の「かお」のこ

1) 谷崎潤一郎『文章読本』(中央公論社) p. 169.

2) 森岡健二『文章構成法』(至文堂) pp. 304-305.

とであった。原稿の「かお」とは言うまでもなく、文字・表記のことである。誤字・宛字・誤用は言うに及ばず、文字が乱雑で読めないもの、投げ遣りで不快感を覚えるもの、文字を書くのに丁寧にとか正確にとか、あるいは読み易いようにとか、何らかでも配慮を働かせた形跡の全くないものが多く、どこから手をつけたらよいのか、添削の筆が宙を迷うということがしばしばであった。筆者は、そうした状況を前にして、原稿を読む立場から、何が読解を妨げるのかを、一度考えてみなければならないと思ったのである。

文章の構成・表現といったことを問題にする前に、更に言えば、内容の貧困を問題にする前に、「近頃の大学生は国語の力が落ちた」と評する場合などの、いわゆる「国語の力」に当たる表記の問題を認識しておく必要があると思う。

本稿は、しかし、この点についての具体的な解決の方向を提示してはいない。実態の報告に止まるものであるが、それは、資料の性格にもよる。資料は、1977年4月以降12月までに提出された本学学生一年生から四年生までの作文のうち、二百点余を任意に抽出したものであり、しかも、自由作文だったために、資料間で対比できる部分は少なく、またどのような文字がどのように誤られ易いかを統計的にはじき出すことのできるような資料数でもない。しかし、ここに現われた現象は、単にある学生一個人に止まるものではなく、少なくとも本学においては、一般の問題として考えられるべきものである。筆者の視野に入った僅かの分量ですらこれだけの問題を抱えているのである。確かにこれは氷山の一角を捉えたに過ぎないが、おぼろげながらもその全体像を想像することは可能である。すなわち、筆者は、本学における今後の国語教育のあり方を考えるとき、本稿はひとつの材料となるだろうと思うのである。

〔1〕 字 形

字形・字体など、文字に関する種々の用語について、まだその術語としての概念が統一されていない面があって、議論に混乱が起こることがあるが、ここでは以下のように定義しておこう³⁾。

3) 字形・字体等についての定義は以下に詳しい。

●林大「漢字の問題」(岩波講座『日本語』第3巻, p. 124~)。

●樺島忠夫「文字」(同上第8巻, p. 32~)。

●天沼寧「筆順と字体」(『言語生活』1976. 8)。

●『シンボジウム日本語』(学生社)第4巻。

字形……書記行動によって実現され、視覚によって把握される図形。

字体……書記行動によって実現される以前の觀念上の図形。

字形は一回一回の書記行動によって実現された、具體的な太さ・長さを持つ平面上の図形であり、二度と同じ字形は現われない。ある文字の字形は、人によって異なることは勿論、たとえ同一人においても、全く同一の字形が現われることはないのである。一方、字体は、いわば抽象的なものであって、字形実現の目標となるものである。文字を形成するのに必要な点画の配置や組合せの觀念は、その文字を使用する社会では必ず共通のものがあるはずであり、少なくとも同一人の内部にあっては、常に一定であるはずのものである。例えば、「木」という文字の字体は、「十」を書いてその横画と縦画の交点から左右斜め下にはらう、というように觀念していても、実際の字形は、第一画と第二画の交点が区々であったり、第三、四画が交点のやや下方で起筆されたり、さまざまな異形が現われる。場合によっては第三、四画が一画のように書かれることすらある。しかしそれでもなお、当人にとっては同一の、「木」という字体を実現したに過ぎないのである。

漢字は、その形象性のために、ごく小さい部分の変異にも気を引かれ易い。しかし筆写という形態でしか漢字が存在し得なかった時代には、僅かな変異どころか、点画の長短や数などが、奔放に揺れ動いていたのであって、活字体に慣れ切っている現代からすると、極めて寛容な字体実現の方式が見られる。多様な筆写体の存在は、字形を正誤の感覚で把握しているのではなく、いわばそれは寛嚴雅俗の意識に基づくものであったことを示すものと思われる。

また、漢字の字形は、記号としてみる場合、冗長度が非常に大きい⁴⁾。その文字であるかどうか、判別に関与するのは必ずしも一点一画のありようではなく、全形の印象が大きく作用したり、部分的特徴が判別に寄与したりするのである。事実、文章を読む速度を保持するならば、一点一画を視認することなど不可能であり、文字の判別が印象によって行なわれていることは明白である。

以上、字形と字体の関係、筆写体の字形の多様性、更に記号として文字を見る立場、の三点のみであるが、述べ来たったところに従えば、字形の許容範囲が

4) 林大(前掲書, p. 131)。

広くとられるべきであることは自明であろう。しかしそれは、教育的立場から字形に峻厳な態度を取ること否定するものではない。学校での漢字の書取などは、ある文字の字体の観念が正確に定着しているかどうかを確認するためのもので、そのためにできるだけ字体の観念に忠実な字形を要求するのである。

だが、一部では、例えば「木」の第二画がはねるかはねないかというようなことを問題にすることがあるようである。これは文字の本質を無視するに等しい規範主義で、基本的には、他の文字と弁別できるかどうか、すなわち、その問題点が弁別的機能を担っているかどうかで考えられるべきものである。この観点からすれば、「未・末」「王・主・玉」「干・千」など、長短・点画の増減や位置・方向の相違によって別字になるようなものは厳密にしなければならないが、「戸・戸」「北・北」「之・之」「糸・糸」「土・土」などに目くじらを立てる必要はないということになる。

以上で、漢字をはじめ、平仮名・片仮名を含めて、本稿における字形の価値にかかわる判断のあり方はほぼ明らかにし得たと思う。

上述のように、字形は、文字の本質に照らして実現された形には相当な幅が許容されるものである。しかし、他人に読んでもらうことを前提とする原稿が、そのために読みにくくなることは避けなければならない。この当然のことを考慮に入れるならば、字形の許

容範囲は案外に狭くなるのではないと思われる。

以下、資料となった学生原稿から、筆者の読解を妨げた字形を模写して掲げる。ただし、平仮名・片仮名についてはできるだけ忠実に模写したが、漢字については構成が明確なのでその必要は認めず、特徴を写すのみとした。

〔1-a〕 平仮名の字形〈表1〉

表中の字形は、一回限りの特異な字形はとらず、その学生が通常の字体と認識していると思われる字形を採集したものである。

文脈の中で筆者が見誤りそうになった相手の文字を、以下に対照させて示す。

例えば、「あ₁：お」は、あ₁ 欄の字形は「お」と誤認する恐れがあったことを示し、「い_{2,3,4,5}：り、り、ソ」は、い_{2,3,4,5} 欄の字形は「り」とも「リ」とも「ソ」とも誤認する恐れがあったことを示す。

あ ₁ ：お	お ₁ ：ち
い ₁ ：ワ	お ₃ ：す、ず
い _{2,3,4,5} ：り、り、ソ	け _{1,2} ：ワ、り
い ₆ ：ハ	こ ₁ ：て
う ₃ ：ラ	こ ₂ ：ニ
う ₄ ：り	こ ₃ ：ン
え ₁ ：そ	し ₁ ：丨（長音記号）

表 1

1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
あ	あ					に	ん	ち	に	ん		ま	ま	ま	ま		
い	い	い	い	い	い	り	り	り	り	り		み	み	み			
う	う	う	う	う		っ	っ	っ				む					
え	え	え				て	て	て	て	て		め					
お	お	お	お	お		と	と	と				も	も	も			
か						な	な	な	な	な	な	や	や				
き						に	に	に				ゆ	ゆ				
く	く					ね						よ	よ	よ	よ		
け	け	け	け			ね	か	ね	ね			ら	ら	ら	ら	ら	
こ	こ	こ	こ	こ		の	の					り	り	り			
さ						は	は	は	は	は	は	ろ	ろ				
し	し	し				ひ						れ	れ	れ	れ		
す	す	あ	あ			ふ	か	ふ				ろ	ろ	ろ	ろ		
せ	せ	や				へ						わ	わ	わ			
そ	そ					ほ						を	を	を	を		
												ん	ん	ん			

し₂ : レ
す₁ : 可
す_{2,3} : お
せ₂ : や
そ₁ : え, ん
た₂ : を
た₃ : に
た₄ : そ
ち₁ : ろ
ち₄ : ら
つ₂ : フ
て₁ : と
て₂ : マ
て₃ : へ
て₄ : そ
と₁ : て
と₂ : こ
な₁ : 友, 反
な₂ : 写
な₄ : を
な₆ : る
に₁ : た, ひ

ね₁ : な
ね₄ : ゐ
の₁ : 入
は_{1,2} : な
は₆ : リ
も_{1,2} : キ
や₁ : せ
ゆ₁ : 何
ら₁ : 5 (数字)
ら₂ : ち, ろ
ら₃ : ろ, う
り_{1,2} : い
る₁ : ゐ
れ_{3,4} : わ
ろ_{1,3} : 3 (数字)
ろ₂ : う
ろ₄ : ち
わ₁ : れ
わ₂ : ゆ
を₁ : さ
を₂ : と
ん₁ : 人

もともと平仮名は速写性に富む字体であるが、「あ」「お」「き」「せ」「た」「な」「ふ」「ほ」「ま」「む」「も」「ゆ」「れ」「わ」「を」などは比較的複雑な方である⁵⁾。ところが、より簡単なはずの「い」「う」「け」「こ」「し」「ち」「て」「と」「に」「の」「ら」「り」「ろ」「ん」と較べて、特異な字形の種類が多いとは言えず、かえって簡単な字体の方に種類が多く、誤認され易くなっている。使用率の問題もあるが、簡単な字体の方が無造作に扱われているということは言えそうである。中でも、「い↔り↔ソ」「う↔ろ↔ち↔ら↔う」「こ↔て↔と↔こ」「た↔に」などは使用率も高く、互いに似てくるであろうことは理解できるが、にもかかわらず、それぞれが隣接して用いられるときにさえ、弁別の特徴を与えようとしないのは怠慢と言うべきである。

「か」「さ」「た」「は」の四行に濁点が与えられた場合、事態は一層複雑になる。「ぐ↔じ↔い, ひ」「ご↔で↔ど↔ご」「ご↔ひ, び」「ず↔お」「だ↔ぞ」「で↔ひ, び, べ」など、信じられないような類似の字形が登場する。多くは文脈に助けられて解読で

きるのであるが、その労力は決して小さくない。また印象も良いものではない。これらは既に個人的筆癖の域を逸脱し、許容の範囲を超えていると言うべきであろう。

〔1-b〕片仮名の字形<表2>

平仮名の字形と同様に、片仮名の字形にも問題が多い。表2から、文脈の中でなお誤認しそうなになった対手の文字を以下に対照させて列挙する。

表 2

	1	2	3	4		1	2	3	4		1	2	3	4
ア	マ	ア	ア		タ					マ	イ	マ	マ	
イ	ハ	リ			ケ	チ	ケ	キ		ミ				
ウ	リ				ツ	リ	シ			ム	ム			
エ					テ	テ	ヲ			メ	ナ			
オ	キ				ト	ト	ド			モ	モ			
カ					ナ	ナ				ヤ	ヤ	ヤ		
キ	キ	ド			ニ	ン				ユ	ユ	エ		
ク	ワ				ヌ					ヨ				
ケ					ネ					ラ	ラ	ヲ	ラ	ラ
コ	ユ	マ			ノ					リ	ソ			
サ					ハ	ハ	ハ			ル	ル	ル		
シ	シ	シ	ン		ヒ	ヒ				レ	レ	レ		
ス	ス				フ	フ	フ			ロ				
セ					ヘ					ワ	ワ			
ソ	リ	ン			ホ					ク	ヲ			
										ン	ン	ン	ン	ン

ア_{1,2} : マ
イ₁ : ハ
イ₂ : ク
オ₁ : オ
キ₁ : も
ク₁ : ワ
コ₁ : ユ
コ₂ : マ
シ₂ : ミ
シ₃ : ツ
ス₁ : ヌ
ソ₁ : リ
ソ₂ : ン
チ₁ : テ
チ₂ : ケ
チ₃ : 4 (数字)
ツ₂ : シ, ヲ

テ₂ : ラ
ト₁ : イ
ト₂ : レ
ナ₁ : 十 (漢数字)
ニ₁ : ン
ハ₁ : い
ハ₂ : へ
マ₁ : ア
マ_{2,3} : て
ム₁ : ハ
メ₁ : ナ
ヤ_{1,2} : カ
ユ₁ : コ
ユ₂ : 2 (数字)
ラ₁ : う
ラ₂ : ヲ
ラ₃ : ろ

5) 樺島忠夫 (前掲書, p.36).

リ ₁ : ソ	ワ ₁ : ク
ル _{1,2} : ハ	ン ₁ : シ
レ ₂ : し	ン ₂ : ニ

使用頻度は平仮名より格段に低いですが、かえってそのためか、特異な字形が多い。字体認識が曖昧なのであろう。「ア←マ」「イ←ハ」「ク←ワ」「コ←ユ」「コ→マ」「ソ←リ」「ナ→十」「ニ←ン」「メ→ナ」などは傾き・長さについての配慮が足りないために別字と誤認しそうなものであり、「シ←ツ」「ソ→ン」は点・最終画の方向が逆になったものである。「チ→テ」「チ→ケ」は第一画と第二画の配置が悪いことと、第三画が第二画に十分交差しなかったために、「ハ→い」「ラ→う、ろ」「ル→ハ」「レ→し」はめり・はりが十分に効いていないために誤認しそうなものである。片仮名ことばが氾濫する中で、意外に字体の認識が薄いことに気が付くのであるが、平仮名でさえ十分な字体認識がない者のいることを考えれば、思い半ばに過ぎるものがある。

〔1-c〕漢字の字形<表3～表14>

漢字の字形は表3から表14まで、十二項に分類した。これは説明の便宜のために分類したもので、その方法には十分な一貫性があるわけではない。各項に重複して登場する字形もあるが、その一方、一項目にのみ登場する字形も、必ずしもそこに分類されねばならぬというものでもない。所詮、字形は個々の文字の問題であり、体系的に把握することは困難で、ましてこれらは書法を無視したうろ覚えの字形実現であるから、文字は驚くほどの変容を遂げ、そのような字形の体系的分類など極めて困難なことに属する。しかし、強いて言えば、大まかではあるが、一応グループを作ることにはできる。表では、通常の字形を左に示し、右に異形を置いた。

<表3>

「人」「違」の二字は共に不要のカギを付している。「人」の第一画のカギは起筆の強調かとも思われるが、異常に大きく、「ス」に近い。

「片」以下「違」まで、不要のハネを付している。

「才」はハネの方向が逆である。

「千」「代」は、異常なマガリが付せられていて、前者は片仮名の「チ」、後者は「化」に見誤るおそれがある。

表 3

人	人
違	違
片	片
危	危
投	投
性	性
達	達
才	才
千	千
代	代

表 4

汗	汗
岸	岸
毎	毎
私	私
秋	秋
稿	稿
手	手
私	私
科	科
考	考
玉	玉
国	国
飛	飛
寒	寒

<表4>

「汗」「岸」とともに「干」の第一画が右から左へはられ、「千」になっていて、字形の要素として誤りと言わざるを得ない。

「毎」以下四字は「ノ」が「一」になったものである。運筆に抵抗があるためであろうか。

「手」「私」「科」の「ノ」が縦画に接しないで横画に接しているのは奇異である。

「考」は第五画目の運筆の方向が異なるため接点が

表 5

予	予
可	可
何	何
同	同
行	行
振	振
持	持
接	接
提	提
摸	摸
擬	擬
門	門
問	問
聞	聞
関	関
対	対
利	利
呼	呼
盟	盟

表 6

手	手
年	年
決	決
悪	悪
興	興
偉	偉
鉄	鉄
解	解
女	女
好	好
妥	妥
要	要
病	病
嚴	嚴
講	講

変ったもの。

「玉」以下は、点の方向が異なる。

<表5>

手偏、門構など、学生の殆どがはねていない。はねる・はねないは「于」「干」のような少数を除いて、弁別的機能を持っていないから拘泥する必要はないのかも知れない。しかし、筆者の目にはルーズに映るのである。

<表6>

「手」「年」以下「解」までの八字は、縦画が上方に突き抜けない例である。これに対し、「女」以下「講」までの七字は、突き抜けないのが通常の姿である。ただ「女」を含む文字の場合は微妙である。「女」の第二画の起筆部分は（筆の穂先分だけ）出てもよいとする人もいる。実際上は字体の認識に影響は全くないが、だからといって、第二画の頭が完全に第三画の上に突き抜けた字形を、全面的に認めるには抵抗があるだろう。

表 7

突	突
空	空
般	般
恐	恐
気	氣
風	風
見	見
挑	挑
逃	逃
流	流
魔	魔
説	説
他	他
危	危
欲	欲
過	過
範	範

表 8

入	入
又	又
祭	祭
機	機
玉	玉
幸	幸
妹	妹
室	室
得	得
課	課
奥	奥

<表7>

「突」「空」の穴冠の第五画は、教科書体と明朝体とで字形が異なっている。「当用漢字字体表」の解釈が問題となるところである。ただし、明朝体とはいっても、活字製造の際のデザインに問題がある場合もあり、どの活字によってその文字を習得したかで、人によって字体の観念が異なることは当然あり得るので、一概

に正誤を決めることはできないであろう。

「般」以下「説」までの十字は、「般」のル又、第二画のように縦画が右方向へ彎曲してはねる（「気」「風」は少し異なる）形が実現されていない。「挑」は木偏が既に誤りであるが、点の方向もまた不適當である。

「他」の第三画、「危」の第五画、「範」の第十四画はハネの前にマガリがあるのであるが、そのマガリの部分からはねているものである。

<表8>

「入」「又」「祭」「機」の右斜め下方へ向かう画が短い。

「至」「幸」「妹」「室」などの平行する横画の相対的長短の違いが明確に把握できていない例が多い。

「得」「課」は「日」の第一画と第二画の下端が延びて直下の横画と合体したものである。「奥」は分離している。

<表9>

「代」から「愚」までは、文字を構成する各部分の均衡を失っているものである。「代」は「氏」と誤りそうである。「対」は「文」と「寸」とが譲合いの関係になっていない。「起」「題」は、「己」「頁」がそれぞれ、「走」「是」の最終画の上にきちんと載らなければならない。

「衆」は画数は足りているが構成が悪い。

「魅」「齡」「懸」は左右置換である。

表 9

代	代
対	対
所	所
起	起
題	題
愚	愚
衆	衆
魅	魅
齡	齡
懸	懸

表 10

不	不
方	方
必	必
気	氣
作	作
昨	昨
教	教
教	教
業	業

<表10>

筆順を誤ったために字形が奇異になったものである。ただ、「不」「必」はあながち誤りとは言えない。もともと筆順自体固定的なものではないのであって、楷行草の書体でそれぞれ異なるのである。結果として正しい形に帰結するならば、それでよさそうなものであるが、点画は足りても実現した形が異様であるならば、

表 11

灰	灰	腰	腰
切	切	福	福
幼	幼	蔡	蔡
来	来	敦	敦
欧	欧	蔡	蔡
直	直	撲	撲
宙	宙	響	響
念	念		
食	食		
皇	皇		
眠	眠		
展	展		
患	患		
搜	搜		
貫	貫		
揚	揚		
得	得		
痛	痛		
痴	痴		
暖	暖		

表 12

欠	欠	時	時	遠	遠
母	母		時	僕	僕
私	私	得	得	養	養
何	何		得	魁	魁
	何	授	授	蔡	蔡
初	初	寂	寂	優	優
良	良	族	族	醜	醜
取	取	現	現	齡	齡
国	国	葉	葉	驗	驗
枝	枝	達	達	軀	軀
室	室	痢	痢	頰	頰
為	為	無	無	懸	懸
姿	姿	喉	喉		
持	持	然	然		
被	被	握	握		
真	真	飲	飲		
枝	枝	試	試		
配	配	達	達		
容	容	暇	暇		
修	修	準	準		

表 13

矛	矛	慢	慢
成	成	壁	壁
身	身	謀	謀
祝	祝	聽	聽
青	青	離	離
前	前	通	通
持	持	疑	疑
面	面	当	当
酒	酒	常	常
帰	帰	学	学
冥	冥	榮	榮
規	規	緊	緊
漆	漆	刺	刺
寒	寒	嚴	嚴
飲	飲		
過	過		
港	港		
農	農		
暇	暇		
達	達		

表 14

学	學
静	靜
世	世
前	前
風	風
高	高
稿	稿
第	才
間	間
間	間
聞	聞

筆順が問題になるであろう。

<表11>

標準字体よりも点画が増加した例である。「直」「食」「眠」などは、明朝体活字の影響である可能性がある。増画の手法は、一点一画を付加するのと、一画を二画に分割するのと二つある。

<表12>

標準字体よりも点画が減少した例である。減画の手法は、二画を一画にする、一点一画を忘れる、部首が欠落する、行書体が混入するなどである。誤字の大きな原因はこの減画であろうことは想像していたのであるが、絶対的な量を誇るというほどではない。

<表13>

単なる点画の増減ではなく、文字を構成する要素に及ぶ変動の生じている字形の数々である。

「通」は第一、二画の「マ」の部分が「ユ」になったもの。「疑」も同様である。

「当」「常」「学」「榮」は、第一画から第三画に至るまでの筆順が異なる。

「緊」「嚴」は「文」と「又」とで互いに誤ったもの。

<表14>

旧漢字二字、その他は略字・俗字である。略字の出現は予想していたほどではなかった。

元来、漢字の異体字が、三体や四体あったとしてもそれは格別驚くには当たらないことであった。文字を用いる際の書き手の態度、記そうとする文書の性格等に依じて使い分けられた。またその変容は一定のルールの下に行なわれて来たため、常に還元の可能な範囲内にあった。しかるに上乗の報告に見える漢字のありようはいかがであろうか。運筆が自然で実現も容易、かつ書き上がりが美的で読み易いことが字形として良しとされる条件であろうが、およそこうした方向とは無縁の、筆法を無視した字形が多い。筆者は先に、字形の許容範囲は広くあるべきであると述べたが、それと、規範に無関心でいることの可否とは別である。読み手が書き上がりの一点一画のあり方に拘泥するのは避けるべきだと述べたのは、決して書き手の規範に従う義務を免除するためではない。「当用漢字字体表」の「使用上の注意事項」⁶⁾に、「点画の長短・方向・曲直・つけるかはなすか・とめるかはね又ははらうか等について、必ずしも拘束しないものがある」と述べていても、それが無制限の許容を意味するとは考えるべきでない。自から規範に立ち返る謙虚さが期待されるのである。

6) 西谷博信「表記の基準と問題点」(『日本語講座』第5巻、大修館)による。

〔2〕用字法

「字を間違える」と言う場合の「字」は殆どの場合漢字である。ただ、「間違え」た内容は、実は二種あって、ひとつは〔1〕で報告したような字形上の誤りで、いまひとつはここで報告しようとする漢字使用上の誤りである。ただし用字法と言う場合、漢字を正當に使用したかどうかだけではなく、漢字を使うべき所と仮名を使うべき所とを適切に書き分けているかどうかということも問題になる。

現在普通に使われる漢字仮名交り文は、日本語の特質を巧みに捉えた表記法で、主要な概念を表わす自立語のたぐいを、視覚に強く訴える印象的な漢字で書き、付属語のたぐいを仮名で書くという、読む時に内容が非常に把握し易い形になっている。明治以降、漢語を大幅に増やしつつ自らを育てて来た現代日本語は、漢字仮名交り文を必須の表記方法とした。漢字漢語を手中に納めることは高い文化を手に入れることであったし、深い思考と表現の自由を獲得することであった。日本語の語彙の重要な部分を支えるのは漢字漢語であることは明白である。国語を使用する上で語彙を豊富に持つことは極めて重要である。語彙の豊かさは思考力の豊かさであり、日本語の場合、語彙量すなわち漢字量と言って良いほどであるから、漢字の豊かで正確な使用は、思考能力のバロメータとも言えよう。

〔2-a〕漢字使用上の誤り

漢字の誤用例を見ていると、考えられないような誤りというものには殆どないことに気付く。誤用はいくつかのタイプに分類できる。その分類した結果を見ると、なぜその字を選んだか、思考過程が推測できるものもある。中には、味わい深い誤用すらあって興味は尽きない。しかし、読み手によけいなことを考えさせる点で、こうした誤りもまた歓迎できないことは言うまでもない。

以下に漢字使用上の誤りの分類リストを掲げる。

<字形の類似による誤用>

徹夜（徹）	成巧（功）
嗚呼（鳴）	点摘（滴）
広宜流布（宣）	構義（講）
続んだ（読）	講議（義）
問題（問）	構議（講義）
睡眠不足（睡）	過中（渦）
還境（環）	指適（摘）
太古の昔（太）	氣持ち（持）

光影（景）	怪奇映画（奇）
侵水（浸）	内容（容）
行動半径（徑）	思う（思）
昨日（昨）	授講（受）
愛ける（受）	授ける（受）
不思議（議）	出合った（会）
受業（授）	休み（休）
允分（充）	憤れる（慣）
無神徑（經）	因果関係（因）
最後の枝（枝）	小遣い（遣）
体質的に（本）	偉くない（違）
賛美（讃）	茶碗（碗）
格研究室（各）	受かぬ顔（浮）
構師（講）	同志（士）
自漫（慢）	絵を拙く（拙）

<読みの類似による誤用>

十才（歳）	清れいに（奇麗）
正格（確）	寝むたい（眠）
詳解（紹介）	行った（言）
添作（削）	普段（不断）
巨人打戦（線）	割けて（分）
陰質な（湿）	高校自代（時）
階け上がる（駆）	今だに（未）
握出をかわす（手）	大部（分）
展事（示）	生き物でも買って（飼）
一カ月が達とうと（立）	帰京（郷）
強慢（傲）	初まり（始）
指差して（示唆）	使名（命）
比確する（較）	生の明し（証）
無盾（矛）	氣まった（決）
待に合った（間）	一辺に（遍）
決局（結）	つながりが合った（有）
内容事態（自体）	連体感（帯）
全々（然）	ふん意氣（困）
自身がない（信）	国語事典（辞）
感心を持つ（関）	読力します（努）
共なう（伴）	氣嫌い（毛）
住ごそう（過）	久しみやすく（親）
始めから（初）	

<意味の類似による誤用>

持ち者（主）	生息（息吹）
宿まらせる（泊）	遠叫え（吠）

常も (いつ)	憶える (覚)
純みきった (澄)	勞れ (疲)
室の (部屋)	

<慣用から外れる用法>

一例を上げる (挙)	席を捜す (探)
～をもって～に変える (代)	

<倒置による誤用>

為行 (行為)	決解 (解決)
---------	---------

<記憶違いによる誤用>

何処かという (故)	
------------	--

お沙汰 (おさた)
若干
随分
大切
変に
気品
普通
全然
滅多に
決して
一見
喧嘩 (けんか)
見当をつける
憂鬱 (憂うつ)

勿論 (もち論)
一向に
鬱陶しい (うっ陶しい)
退屈
調子
余裕
万全
審判
傲慢
奇麗
非常
簡単
無理遣り

〔2-b〕 漢語を仮名で書いたもの

自立語のうち、漢語だけはせめて漢字で書きたいと思っても、それが当用漢字であるか、表外字であるか、一一調べなければならないかと思うと、それだけで筆鋒が鈍るものであるが、まして元来が漢字などなるべく使わずに済ませたい人たちは、当り前の漢字さえ使わなくなってしまう。当用漢字表が制限色を強く持っていた時代に教育を受けた人は、表外漢字は使ってはならないと思っているから、例えば、「霧」が表外字なので「ふん囲気」と書くほかなく、交ぜ書きを嫌えばすべて仮名書きにしてしまう方が面倒がなくてよいとばかりに、次第に仮名の多い平板な原稿にしてしまう。幸い当用漢字表の制限的色彩は緩和されて来つつあるが、十分でない。

以下に、仮名で書かれた漢語を、漢字で掲げる。漢字右肩の記号は、○=教育漢字、△=当用漢字、×=表外漢字である。()内は表外漢字は仮名書きにしたもの。

一体	楽にできる
残念	目下のところ
不思議	制約
漠然と (ばく然)	氣にくわない
雰囲気 (ふん囲気)	些細 (さ細)
証拠	お嬢さん
点検	繊細
次第	臆病 (おく病)
一所懸命	謙虚
興奮	迷惑

〔2-c〕 漢語の交ぜ書きしたもの

前項で「さ細」「ばく然」「ふん囲気」「おく病」「憂うつ」「もち論」「うっ陶しい」などの交ぜ書きがいかに見苦しいか、よく分かるが、実際に学生の作文中に用いられている例を以下に掲げる。()内は該当する漢字。右肩の記号は前項に同じ。

ふん囲気 (雰)	てっ去 (撤)
まい時間 (毎)	む中 (夢)
ぎぜん性 (偽善)	ぐ直 (慮)
さん事 (惨)	ちゅう車 (駐)
かと期 (過渡)	こん度 (今)
射げき (撃)	うっ積 (鬱)
無だ (駄)	こう景 (光)
洋菓し (子)	ばっ金 (罰)
防えい (衛)	洗たく (濯)
敗ぼく (北)	洞くつ (窟)
軽べつ (蔑)	便らん (覧)
先ばい (輩)	自しん (信)
消音き (器)	指てき (摘)

交ぜ書きは仮名書きの場合より一層見苦しい、と筆者は思う。しかし根本的な原因は当用漢字そのものにあるのであって、なにも学生のせいばかりではないのである。

おわりに

はなはだ不十分であるが、以上、私見を交じえつつ調査報告とする。

なお、国語表記の問題を考える場合、当用漢字音訓表内の文字を用いないで和語を仮名で表記したものや、仮名遣い、送り仮名の問題も関連させて考えるべきであるが、今後の課題として残すものである。

＜参考文献＞

山田忠雄『当用漢字の新字体——制定の基盤をたづね

る——』

橋本進吉『文字及び仮名遣の字究』（橋本進吉 著作集 第3巻）

築島裕「古代の文字」（『講座国語史』（大修館）第2巻）

山田俊雄「近代・現代の文字」（『講座国語史』（大修館）第2巻）